

## 被修飾性から見た日本語名詞の特徴付け

5G-2

清水 富門 披田野 陽一

(株)日本電子化辞書研究所

## 1. はじめに

(株)日本電子化辞書研究所(略称EDR)では、計算機用の大規模な電子化辞書の開発が進められているが、その一環として、大規模な言語データ等を利用して、語の文法的な性質・意味的な性質の研究が進められている。筆者らは、その一環として、日本語における名詞の文法的性質に関する検討を続けているが、本報告はその中で、名詞の被修飾性に関する検討結果をまとめたものである。

## 2. 名詞の認定

名詞の文法的性質を検討するためには、名詞とは何であるかをはっきりしなくてはならない。以下、本報告における品詞の意味付け、及び名詞の判定基準を述べる。

- (1) 品詞は用語に対して付与するのではなく、その意味・用法に対して付与するものとする。したがって一つの用語でも、その意味・用法に多様性があり、一つの物として捉えにくい場合には、品詞を別々に付与することができる。

例 ① “通り”に、木が生えている。

② 君が予想した“通り”、彼は来なかった。

③ この問題には、“二”通り”の解き方がある。

以上の三つの“通り”は、それぞれ別に品詞を付与する。

- (2) 用法が異なっても、意味に大した差異がなければ、同一の文法的単位とみなし、品詞を一つ付与する。

例 ① 君が予想した“通り”、彼は来なかった。

② 予想“通り”、彼は来なかった。

以上の二つの“通り”は、文法的には、同一の物として取り扱い、一つの品詞を付与する。

- (3) 名詞は物・事がなんであるのか、どうであるのかを示す具体的な内容を持つこと(付属語ではないこと)。

- (4) 名詞はそれ自身、もしくは助詞を従えて文節を形成できること(接頭語、接尾語、造語成分等でないこと)。

- (5) 名詞は、活用語の一部、一形態ではないこと(動詞、形容詞等の語幹や、終止形ではないこと)。

- (6) 名詞は「な」を取って、後ろに来る語の様子を表わさないこと(形容動詞ではないこと)。

- (7) 名詞は、「が」、「を」、「に」、「で」、「から」のいずれかの助詞を自然に(おかしさを感じさせないで)かつ構成的に(個々の要素の意味が保存され、一般的な規則により全体としての意味が把握されるような形で)後ろに従えるか、連体修飾(3章参照)を自然に受けること(副詞や助詞を従えて副詞的に使われるのみの造語的な成分ではないこと)。

上記の基準は、報告者が検討を進める上での拠り所として立てた物であり、判定基準として曖昧な要素を多分に含んでいるが、名詞とそれ以外の間に一応の境を置くことはできる。なお、上記の基準は、EDRで開発中の日本語辞書における基準と完全には一致するものではない。

## 3. 連体修飾の受け方による特徴付け

ここで言う連体修飾とは、動詞、形容詞の連体形、過去の助動詞「た」、「だ」、断定の助動詞「な」、助詞「の」、連体詞等でおわる節(統語的にそれ以前の要素を受けない文中の語の集り)が統語的に係ることである。連体修飾を受けるかどうかという観点から名詞を見た場合、連体修飾によりさまざまな観点から修飾を受ける物、連体修飾節の意味的な役割が限られている物、連体修飾を受けない物、名詞の直前の連体修飾節のみを受ける物、名詞と離れた連体修飾節をも受ける物等がありその性質は多様である。以下、こういった観点から名詞の特徴付けを試みる。

特徴1 さまざまな観点からの連体修飾を受ける。

対象を表わす普通の名詞は、さまざまな観点からの連体修飾を受け、連体修飾節は必ずしも直前にある必要はない。例えば、「本」という名詞であれば、「最近出版された言語学についての本」等の表現が可能である。

特徴2 基準を表わす意味の連体修飾を専ら受ける。

「上」、「東」、「中」、「全部」、「一部」等の位置、方向を表わす名詞、割合を表わす名詞等は、基準を表わす意味の連体修飾を自然に受けるが(「机の上」、「参加者の一部」等)、それ以外の意味の連体修飾は受けにくい。この場合絶対受けないということは必ずしも言

えないので、上記のような傾向をしめす定義にならざるを得なかった。

特徴3 連体修飾を受けにくい。

「素手」、「本気」、「多量」、「本当」、「事前」、「東西」等の名詞は連体修飾を受けにくい。

特徴4 自らの修飾性を補助する意味での連体修飾を受ける。

形式的には、連体修飾を受けているが、その名詞自身が修飾されているというより、全体として文中の他の要素を修飾する表現を形成していると感じられる場合である。「～の為」の「為」、「～する都度」の「都度」などが例にあたる。この定義は、まだ感覚的な定義であり、該当する語の範囲も明確に示してはいないが、特徴としては重要なものであると思われる。ともかく、こういった特徴を持つ場合、連体修飾節は直前に一つくることが多く、さらにその文法的な構造に限られる場合が多い。そこで、連体修飾節を持つ文法的構造から特徴4をさらに細分できる。以下は特徴4を細分した一例である。

特徴4.1 助詞の「の」で終わる連体修飾を受ける。

「為」、「せい」、「おかげ」等

特徴4.2 指示連体詞（「その」等）による連体修飾を受ける。

「為」、「途端」、「後（ゴ）」等

特徴4.3 動詞の終止形、過去の助動詞「た」、「だ」で終わる連体修飾を受ける。

「為」、「以上」、「所」、「通り」等

特徴4.4 動詞の連体形で終わる連体修飾を受ける。

「うち」、「最中」等

特徴4.5 過去の助動詞「た」、「だ」で終わる連体修飾を受ける。

「きり」、「あげく」、「途端」等

特徴4.6 形容詞の終止形、断定の助動詞「な」で終わる連体修飾を受ける。

「為」、「うち」、「順」、「程」等

上記のうち、特徴4.4、特徴4.5は特徴4.3を細分したものになっているが、特徴4.4、特徴4.5の一方しか持たないもの、両方を持つもののいずれもが相当数存在し、特徴4.3自身は一つの特徴として把握するのが自然なので、細分する前の特徴と細分した特徴の両方を項目として上げた。

#### 4. 連体修飾以外の修飾の受け方による特徴付け

名詞のうちには、3であげたような修飾以外の修飾を受ける物がある。また、名詞の後ろ等について接尾語的に使われるものがある。こういった特徴は、名詞としては例外的な物であるが本章では、こういった特徴の整理

を試みる。

特徴1 動詞・形容詞の連体形あるいは過去の助動詞「た」、「だ」+「が」で終わる節により、規定される。「故」、「為」、「最後」等がこれに当たる。古風な言い回しの名残であると思われる。

特徴2 格助詞で終わる節により修飾される。

「から」で終わる節により修飾される名詞に「向こう」、「先」、「後（のち）」等がある。「より」で終わる節により修飾される名詞に、「外（ほか）」、「以外」等がある。また、「と」で終わる節により修飾される名詞に、「同時」、「同名」等がある。

特徴3 数量表現により修飾される。

「前」、「上」、「右」、「隣」等の位置・方向を表わす名詞がこれにあたる。

特徴4 副詞により修飾される。

「すぐ」、「ずっと」、「極く」等の程度を表わす副詞により修飾される名詞に、「前」、「近く」、「遠く」、「一部」等がある。また、「ちょうど」、「ほぼ」等の正確さを表わす副詞により修飾される名詞に「前」、「正面」等がある。

特徴5 名詞の後ろにつき接尾語的に用いられる。

「程」、「程度」、「前」、「順」、「自身」、「自体」等がこれにあたる。

#### 5. おわりに

本研究をすすめるにあたって一番苦労したのは次のことであった。すなわち、名詞の中に連体修飾を受けるか受けないかといった重要な文法的性質があることが漠然と分かっている、この語は連体修飾を受ける、この語は連体修飾を受けないということがなかなか断言できないことである。この事は、本報告で上げたすべての文法的特徴に対して言えることである。このように現段階では、上記の文法的特徴はすべてなんとなく捉えられたものであり、今後その意味をより明確にしていく必要があると考えている。

#### 【謝辞】

本研究の機会を与えていただいたEDRの横井所長、柏木第3研究室室長及び貴重な御意見・コメントをいただいたEDRの研究員の皆様に感謝いたします。

#### 【参考文献】

- 1) 内田他, 「自然言語処理のための電子化辞書構成法」, 情報処理学会第35回全国大会, 1S-4(1987)
- 2) 奥津著, 生成日本文法論, 大修館, (1974)